



迷った時にはトライ 秋にはドイツへ留学

文学部人文社会学科ドイツ語文学文化専攻3年

ながぬま しゅうと
長沼 秀斗 (私立鵜沼高校)



ホームステイ先の家族と

あつという間の2年間だった。これが今の私の率直な気持ちである。大学入学前、大学生は自由な時間がたくさんあると聞いていたが、実際に自分が大学生活を送ってみると、やるべきこと、やりたいことも多く非常に忙しく感じる。ただ、それは大学生活が充実している証拠だと思う。

私は高校の指定校推薦で中央大学に入学した。このドイツ語文学文化専攻を選択した理由は、ドイツ、ヨーロッパに対する憧れがあり、実際に語学を身につけ、留学したいと思ったからだ。

独文では、ドイツの文学、文化、そしてドイツ語を主に学び、必修科目以外にも豊富な授業の中から選択科目として履修することができる。1年時にはドイツ語の文法を基礎から学ぶ。それに加え、ネイティブの先生に教わるコミュニケーションの授業もあるので、1年間でドイツ語に対してある程度の親近感がわいた。2年になるとドイツ語の授業は、基礎と発展の2コースから選択でき、自分のレベルに合わせて学ぶことができる。私は発展コースを選択した。ここでは常に発言することを求められ、90分間集中を切らすことはなかった。教室には緊張感があり、どの授業よりも労力を使った分、授業後の充実感が大きかったのは間違いない。また、一緒に授業を受けた友達からは刺激を受け、私はこの環境下

に身を置いたことでモチベーションを高く保つことができた。

2年時には他にもドイツ語の授業を選択したが、中でも印象深いのは「資格のドイツ語」という授業だ。この授業では、ドイツの映画『アナと雪の女王』をドイツ語で観て、聞き取り、翻訳をする。最初はとにかく苦戦した。容赦なくドイツ語で話し始めるアナとエルサ。私は全く聞き取ることができず、何度も何度も巻き戻し、何となく書き取ることの繰り返し。毎週予習が不可欠だったが、そのおかげで次第に耳も慣れてきて、聞き取れるようになってきた。頻繁に発表の機会が設けられ、グループで翻訳したシーンのアフレコをしたり、歌を歌ったりした。先生は「ドイツ語が母語ではない私たちが正しい発音をするには歌うことだ」とおっしゃっていた。毎回必死に覚えて

ただだけあつて今でも歌詞を覚えている。ところで、私が大学生活の目標として掲げてきたのは、長期の留学である。私は今年の秋から約1年間ドイツへ留学する予定だ。これは高校の時から見据えていたことで、大学入学後はそのために努力してきた。とはいっても本格的に動き出したのは2年の夏休みを終えてからだだった。出願資格としてドイツ語検定が必要だったが、私は今まで受けたことがなかったので、出願前

2級に合格しなければならなかった。この時期は本当に多忙で、色々やらなければいけないことが重なり、もっと早くから勉強しておけば良かったと後悔した。昨年の秋から今年の春休み、長期留学が内定するまでは本当にあつという間に感じた。この時期に自分が頑張ったことで、手にしたドイツ留学。向こうに行っても多くのことにチャレンジし、絶対に有意義な1年間にしたいと思う。

学習面以外にも大学生になってから、さまざまな経験をしてきた。1年の時に体育の授業として選択したキャンプではたくさんの自然に触れた。野尻湖のほとりにあるキャンプ場で電気のない生活をし、ヨット、カヌーなどのウォータースポーツ、標高約2500メートルの火打山登山など貴重な経験をすることができた。他にも2年の夏休みにはカリフォルニアでホームステイをし、その半年後には旅行でフロリダにも行ったが、海外へ行く度に文化の違いや積極性の大切さに気が付く。これらの経験ができるのも長期の休暇が取れる大学生の特権だと思う。

私は大学生のうちは何事にも「迷った時はトライすべし」と考えている。というのも、たとえどんな結果になろうと必ず将来の糧になると信じているからだ。今後も大学生として過ごす期間を大事にして将来につなげられるよう日々前進していきたい。

の
しな!
生活
vol.5
の様子を掲載し、ご父母の
キャンパスライフの風景、また
の情報を発信いたします。

最後の
試験で

文学部生 リアル 学生

文学部生のリアルな学生生活
皆様に文学部生の充実したキ
文学部ならではの取り組み等



貴方の背中を追いかけて フランス留学で学び充実

文学部人文社会科学科フランス語文学文化専攻4年
まつもと しほみ
松本 潮美 (東京都立国際高校)

私の人生を良い意味で狂わせた本が1冊ある。タイトルは『怪盗クイーンはサーカスがお好き』。はやみねかおる先生が講談社・青い鳥文庫から2002年に出版した本である。この本の主人公、クイーンは狙った獲物は逃さない、神出鬼没の怪盗だ。私がこの本を初めて読んだのは小学5年生の時。不可能を可能に変える怪盗クイーンに、幼かった私は完全に魅了され、一歩でもクイーンに近付きたいと、切に願うようになってしまった。しかし、クイーンの年齢も性別も国籍も一切不明。唯一分かっていたことは、怪盗クイーンが「フランス語話者である」ということだけだった。文学少女は決意した。「見ててやあ！いつかフランス語を話せるようになって、怪盗クイーンと実際に話すんやあ！」

もちろん、怪盗クイーンは架空の人物だ。実際に話すことはできない。しかし、その瞬間から、私の長きにわたるフランス語との闘いの幕が切つて落とされたのであった。

まさか、このようなロマンチック(?)な理由で始めたフランス語を、大学でも専攻することになるうとは誰が予想していたであろうか？入学後から2年前期にかけては、フランス語を深めることに重きを置いていた。フランス語は高校から学んでいたが、中央大学の教授陣の元で学び直すことによ

って、しっかりとした基礎を作ることができた。そして、その結果、大学2年次からフランス・リヨンにあるリュミエール・リヨン第2大学への1年間の交換留学が決まった。念願であった。しかし、留学生活の初め3カ月は、絶望の日々続きであった。少しは自信があったフランス語も、実際、現地では全く通じず、自分の力不足を感じさせられた。言葉が分からないからか、何もかもがうまくいかないのだ。自らが想像したものとは異なる留学生活がつかなくて、逃げてしまいたい、日本に帰りたいと何度も願っていた。リヨンでは、主にフランスの児童文学、出版論、そして17世紀のフランス文学について学んでいた。授業に積極的に参加し、忌憚のない意見を教授に投げかける現地の学生に刺激されて、私も必死に授業にしがみついた。ボイスレコーダーを持ち込んで授業を録音し、部屋に帰ってから聞き直す作業を毎日繰り返した。学期中、遊ぶ時間はほとんど取れなかったが、学ぶことが楽しくてたまらなくなっていた。特に、フランスの児童文学について扱った授業は、とても思い出深いものとなった。私のために2週に1回のペースで勉強会を開いてくれた友人。私の拙い質問に呆れることなく、笑顔で真摯に答えてく

ださった教授。そして、日本の児童書について紹介し、喝采を浴びたプレゼン。全速力で駆け抜けた1年間の留学生活は、とても充実していたし、恥ずかしいくらい光輝いていた。

留学を終えたからといって、私のフランスに対する熱意が消えてしまったわけではない。むしろ、留学を終えてからの方が、中央大学での生活も充実しているように感じている。現在はフランス語のみならず、文学や文化、そして現代事情など、フランスに関することを多岐にわたって学んでいる。気になる授業を聴講したりもしている。卒業論文では留学中に学んだ「フランスの児童文学」を扱う予定だ。そして、将来的にはその知識を活かしながら、児童書にかかわる仕事がしたいとも思っている。

残念ながら、怪盗クイーンと話すという夢はまだ叶っていない。それを聞いたら、小学生だった頃の私のがっかりするだろうか？でも、今、私は幸せだ。好きなことがあって、それを存分に勉強することができる環境が私にはあるのだから。だからこそ、いつでも私を優しく見守ってくれる家族や友人、与えてくれた中央大学に、私は感謝の意を表したいと思う。



リュミエール・リヨン第2大学